

京大東洋史

- 1 古代帝國の成立
- 2 貴族社會
- 3 獨裁政治の時代

昭和二十七年一月十五日	大阪東京創元社發行
A5判	1一七六頁 2一八八頁 3一九四頁
定價	1一八〇圓 2二〇〇圓 3二一〇圓

宮崎 市定・宇都宮清吉
大島 利一・羽田 明
外山 軍治・内田 吟風
村上 嘉實・羽田 明
鷺淵 一・田村 實造
三田村泰助・羽田 品

この書評をひきうけたあとで、私はふかく後悔せざるをえなかつた。後尾にしるすように、敘述は平明だが、内容としては今日までの研究の水準が盛られている。とても私などの手に負えるものではないなとかんがえたが、結局おもしろいなほしてここに無謀な試みをあえてする次第である。文中當を失するような點があればよろしくおゆるしをいただきたいとおもう。

第3巻までを通讀して疑問を感じた點を列挙すれば、およそ次の七項目になるようである。

- 1、古代都市國家の崩壊過程について。周代の都市國家は血縁組織

を強固にのこしながら之に立脚した奴隸制社會であるが、その血縁が稀薄になつてゆくにつれて、この周朝的體制は崩れてゆく。「これをつなぎとめるために生れたのが『宗法』とよばれる制度である」(第一卷・四三頁、以下一四三のように略記)が、さらに「この非常事態によつた周王は、封建諸侯にゆだねていた民衆を王の兵隊として徵集するために戸口調査を行い、中國全土の民衆をことごとく王臣として直接に支配しようとした」(一一四五)。ところがそれにも拘らず周朝は次第に權力を失ひ、春秋戰國時代に入る、しかしながらここに生れた覇國も亦、「そのほろぼした都市國家にふたたび自國の貴族を封建することなく、これを君主の直轄地とし、中央から官吏を派遣して治めさせる方式をとりはじめたのである」(一一五一)。この方向は遂に秦の統一もたらすのであるが、かつて周室のなしえなかつたものをここではなぜなしえたのか。この點明確な解答が與えられていないようにおもう。とくに戰國から秦漢にかけて成立する諸權力の十分な理解こそ、古典古代のゾモクラシイに對比される古代東洋の專制主義の秘密をとくキイポイントであらう。

2、後漢帝國の性格について。光武帝が後漢帝國を再興しえたのは、かつて前漢時代に甚しい壓迫を加えられていた豪族の支持があつたのであつた。したがつてこの時代には「官界は次第に豪族化していった。もはや豪族を帝國の權力が壓迫するなどということは、くすりにしたくもみつからない」(一一一〇七)。一方「貴族・流民・奴隸の群は、あとからあとと豪族の門にはしり、……農業社會の構成はために變化し、帝國の基礎はくずれて滅亡への道はひたすらにおしすめられる」(一一一〇八)。ここにひとつの矛盾が感じられないだらうか。後漢帝國を支持する豪族の勢力が階級分化の進行によつて

つよくなればなるほど、帝國は安泰である筈である。しかるになぜ滅亡の道をえらばねばならなかつたか。ここで、官僚としての後漢豪族の階級的性格が問題になつてくるし、第二に、赤眉や黃巾などの諸反亂の果した役割が（たんにモップであるかどうかということでなしに）歴史的に究明されねばならないとおもう。

3、隋唐帝國の成立について。「南北の統一者である隋の文帝は、中央集權化のために豪族勢力を抑制することを憚らなかつた」（二一九）。こうして彼は九品中正を廢止し、新しく科擧制度を創始するのであるが、これは北朝以來の均田制府兵制の實施とも軌を一にするものであらう。ところで、「中世は古代帝國が崩壞した後に生じた分裂時代である」（一一一二）べきなのに、また貴族支配の時代の筈であるのに、隋唐はなぜこのような體制をとらねばならなかつたのか。またとりえたのか。この點についての確答があたえられていないようである。隋唐兩朝の出自が北朝系であるとしても、それだけではこの歴史的必然をとき明することはできない。ここに隋唐帝國を權力そのものとしてつかむ必要が生じてくる。一方それは南北朝兩權力の理解によつてたすけられなければならない。したがつて、南朝を君主權に優越する貴族社會としてでなく、また北朝を北方民族の漢人貴族抑壓の權力としてでなく、奴隸・部曲・一般農民の支配機構として重點的にとらえねばならないのではないか。たとえば、南朝貴族の個々の權力がいかに強大であらうともやはり君主を擁立しなければならなかつた事情におもひをいたす必要があるだらう。したがつて「豪族より門閥貴族へ」（二一四八）の移行を、たんに「累世高官を輩出し」「文化的教養と官途」とを獨占する階級の形成をとらえるだけでなく、支配階級の發展そのものとしてかんがえねばならない。ここに、いわゆる貴

族社會の根本問題がのこされているとおもう。

4、貴族社會の没落について。「舊貴族も官僚貴族もその他新興の大地主も唐末の叛亂によつて多く没落し、特に門閥貴族や官僚貴族には唐の滅亡とともに殺害せられ、續々として没落し去つた。五代の天子も中國の君主も、異民族出身の武將か、漢人であつても盜賊上りか卑賤のものが多く、門閥など問題にしない、實力主義の風潮がさかんになつた」（二一四二）。ところが一方盛唐以後の莊園制は宋代になつてますます發達し、このような莊園の所有者こそ宋以後の官僚階級を形成するものとすれば（三一四九）、唐の貴族と宋以後の官僚との間にはどのような差異と發展とがあるのだろうか。すなわち貴族制が崩壞しなければならなかつた必然的な理由はどこにあるのだろうか。

5、君主獨裁制の成立と發展について。貴族制崩壞の問題はただちにこの問題をうみ出す。「宋の太祖は武人の專横にこりていたので、かれは天子の位につくと、まず近衛軍の組織を改め、……さらにまた節度使からは兵・政・財の三權を取りあげ、地方によつて半獨立の形勢に傾くのを防いで、中央集權制を強化した」（二一四八）。かつて唐の中央政府は分權化する節度使を抑壓しようとして失敗、ついに滅亡に至つた。ところでいまこれに成功した宋朝とははたしてどのような權力であつたのか。このことがあきらかにされなければ、唐宋間の飛躍を本質においてつかむことはできないとおもう。第3卷の冒頭のべられた君主獨裁制は、（政治型態としての）貴族制と對比された獨裁制である、君主獨裁制が一つの歴史的現實であるためには、まず何よりも個戸や小農民への支配體制としてとらえられねばならない。こう考えることによつてふたたび貴族制の崩壞が問題となる。この點

で五代軍閥を異民族出身の武將や盜賊の政權と規定しきつてよいだらうか。ただたんに文化主義に對する武力主義としてでなく、何らかあたらしい土地所有制に基礎を置いた權力としての規定が必要とおもわれる。こうして莊園制が唐宋間において發展、的にとりあげられねばならないのではなからうか。實際、奴婢使用に對する小作人使用というようなく表面的な把握だけでは、問題はもう一步すすまないようにおもわれる。

6、文化の問題について。たとえば、「經を權威づけるものは實に『我』であつて、これ等の主張の中に近代精神の象徴である自我の確立の現象が見られる。この自我意識の下に展開された中國のヒューマニズムこそ新儒教主義の根本性格であつた」(三一九八)。だがこのよりな中國のヒューマニズムがいかにして形成されるかといへば新儒教主義の思想家たちはこれを内省と讀書とに求めたのである(三一〇六)。まことにこれは士大夫の官僚地主的の世界における人間形成の仕方であり、ここに完成される人格は士大夫的人格といわねばならない。宋學における革新的意義とともに、他方ではその限界についても語られねばならないのではなからうか。それはこれらの文化の擔い手たちの歴史的社會的役割の評價いかんにかかつてるのである。

7、東西交通について。一例をモンゴル世界帝國の成立にとりたて。『モンゴリアの高原ではトルコ系・モンゴル系の諸部族が相争つていたが、その一部のモンゴル部からテムジンが現れるに及んでこれらの諸部族を統一し、チンギス・カーンと稱した』(三一二二八)。

「その領土はいわば私領であつて、そこに彼が絕對權を振うのは極めて當然であつた。しかし實際の統治となると、……諸王を分封して封建制を立て、中央の地は自ら保持することとした」(三一二一八)。だ

からモンゴル諸部族の統一を可能にしたのはチンギス・カーンの絕對權であつたのであるが、それはいかにして生れ、また内容的にいかなるものであつたのだらうか。中國史における元帝國の役割の把握のためには、この點を明確にする必要があるだらう。いわゆる征服王朝の意義については、中國の支配體制強化としてとらえられているが(三一五八)、それでもなお征服者側の權力の性格が問題となる。ここに東西交通史の使命があり、このような觀點に立つてはじめて統一ある東亞史が成立するのではなからうか。したがつてモンゴル民族という場合、それがどのような發展の段階にあつたかが注意ぶかくさぐられねばならないとおもう。

以上七項目にわたつて疑問におもうところを挙げたが、そのおのにおのの共通點が存在するように感じられる。それは人が歴史的發展という場合、それをどういふ内容でかんがえてゆくかということにもなるとおもう。ここで私は内藤博士ののこされた次の一つのことばを想いおこす。「中國の近世は何時から始つたとすべきであるか。從來は多く朝代によつて時代を區劃する方法が行われたが、……史學的に言うときには、……必ず近世を形成する内容がなくてはならぬ」(中國近世史)。また、「つまり門閥の没落は、太宗の政策などからではなく、他の原因から自然に、(傍点引用者)行われるに至つたが、その時は唐の滅亡する時であつた」(同上)。博士の史觀の最も卓越した點は、複雑な歴史現象を互に連關づけ、流動的、統一的に把握しようとしたところにあるだらう。しかし他方ではその發展を自然的な推移とし、社會の權力關係の發展としてとらえられていない。これは博士の文化主義的な立場によるものとかんがえられる。これは博士の偉大さにもかかわらず大きな限界ではないだらうか。

これは忌憚なく云つて今日までの東洋史學のあり方でもあつたのではないだろうか。したがつて、歴史現象の統一的把握という博士の不滅の遺産を、こうした限界を打ちやぶつて、具體的にどう生かしてゆくかが今日の切實な課題でなければならない。さきに提起した諸問題は、何れもこのこととつよい關連をもつてゐるように感じられてならないのである。

しかし一方、問題がこれほど具體的になつてきているのは、先學のいくたの苦斗の結實である。その意味で本書刊行の歴史的使命については十二分に味わねばならない。卒直な印象としてこれほど平明な通史がかつて編まれたことがあつただろうか。これは決してたんなる外見上の問題ではない。傳統的な漢學の絆をやぶつてこのような市民的な東洋の歴史が生れるには、すぐれた内容なしでは全く不可能である。こうして本書が今日の世界史教育に果た役割は、すべての研究者をして生き生きとした抱負を感じさせずにおかないだろう。

〔追記〕この稿をおえたとき第4巻「東亞の近代化」が出された。この巻は現在の情勢と直接につながるものなので、機會をあらためた方がよいとおもわれるが、次の一事だけつけ加えておきたい。

東亞の近代化とはどういうことであらうか。そしてそれは現代中國の「人民民主專制」とどのような關係にあるのだろうか。この点は今日の東洋史研究者にとつてもつとも切實な課題でなければならぬが、残念ながら本書では必ずしも明かにされていないようである。それは何といつても、中國の民衆がながい間何にしていたげられ、何と戦い、何を解決して今日に至つてゐるかといふことの理解にかかるのである。このような觀點から始めて、數次の國共合作や土地革命の意義も、あれほど熾烈な抗日戰の祕密もとけてくることとお

もわれる。したがつて東亞の近代化は、ヨーロッパの産業革命文化の侵入によつて「しらすしらすの間に用意される」(一五一五)ものであるかどうか。いわんや、それは民衆の歩みを拾象した國共斗争史とは全く無縁のものであらう。

〔谷川 道雄〕

昭和二十六年度京大東洋史學科
卒業生及び論文題目

一七世紀におけるキリスト教宣教師の
トンキン傳道 小玉新次郎

金代平陽府の文化の基盤としての經濟

苦名 厚

中國における近代美の萌芽 西瀬英美